

主題聖句: イザヤ 41:10 「恐れるな、私があなたと共にいる。たじろぐな、私があなたの神である。私はあなたを奮い立たせ、助け 私の勝利の右手で支える」。(『聖書協会共同訳』)

<序>

気候危機<sup>1</sup>の最前線である国々の呻きは無視できない段階に来ている。ブラジルの先住民であるチャイスレイさん(24歳)は声を COP 会場であげた。「川は死に絶えつつあり、花は昔のように咲かない」と<sup>2</sup>。

先週は、2020年7月4日に、熊本県球磨川氾濫による50名の死者、約1,020ha、約6,100戸の泥の被害があった相良村<sup>さがら</sup>にいた。泥水で覆われた球磨川ボランティアにおいて、相良村で園児たちと田植えから自作自農した「復幸米」の脱穀をしてきた。今週は、千葉県南房総<sup>めら</sup>布良で漁ボランティアを経て、宮城県石巻市渡波<sup>わたのは</sup>への第124回目の訪問。長浜幼稚園の年長組60名の園児たちと共に、自作自農の無農薬、有機のコメを分かち合った。その後、福島第一原発のメルトダウン(炉心溶融)により、住めなくなった浪江町に行った。そこでは「ホット・パーティクル」という不溶性放射性微粒子が口、呼吸、傷口から侵入すると内部被ばくという恐ろしい目に見えないものがある<sup>3</sup>。放射能の影響はすぐにはわからない。しかし、自然災害が与えた危険性の高い残存物が存在している。

皆さんは、自然界は神の被造物と考えておられるか。近年の津波、地震、台風などによるカオス、無秩序な災害に無関心であってよいものか。自衛隊、行政、お上のだれかがやってくれると信じておられるのか。自然災害が牙を剥いた痕跡は放置されたままである<sup>4</sup>。

神が介入なさると考えるか、自問してもらいたい。

スコットランドのキリスト教神学者にトーマス・F・トーランス[1913-2007]がいる。京都大学名誉教授の水垣渉<sup>わたる</sup>はトーランス著『科学としての神学の基礎』を翻訳した。トーランスは、秩序の究極的な回復と刷新という希望を語る。神が秩序づけの主導権を握っているという根本的な信念により、宇宙の中に現存する無秩序が将来においては消滅するという<sup>6</sup>。

一方、物理学者、天文学者、科学者は、宇宙は凍結 freeze するか、焼結 fry のどちらかで終結するという終末論を掲げる。50億年後には、太陽は銀河系の軌道を呑み込み赤色巨星になるといふ。その後白色矮星(わいせい)になり、400億年から500億年後には星の形成は終わるだろうと預言している<sup>7</sup>。

<sup>1</sup> 2020年6月12日、気候変動の影響とみられる災害が激化していることから、人類を含む全ての生き物の生存基盤を揺るがす「気候危機」(地球温暖化)と表現。『2020年版「環境・循環型社会・生物多様性白書(環境白書)」』

<sup>2</sup> BBC News (2021年11月7日)。英スコットランド・グラスゴーで、2021年10月31日～11月12日、COP26「国連気候変動枠組条約第26回締約国会議」、「Conference of the Parties(締約国会議)」(1997年、京都議定書が結ばれたのは3回目 COP3 だった)。約120カ国の代表団、科学者、環境保護活動家など2万5000人以上が集まり、北極などの氷が解けることによる海面の上昇、熱波による森林破壊など、数々の現象によって地球と地球上に住む様々な生き物の生存が危うくなっている状態を話し合う。地球温暖化対策に後ろ向きな国に贈る「化石賞」に日本を選んだと発表した。

<sup>3</sup> 拙論「田・山・湾の復活」その17(季刊誌『支縁』No.37 神戸国際支縁機構 2021年4頁)。拙稿『中外日報』(2020年10月23日付)。

<sup>4</sup> 自然災害「暴風、豪雨、豪雪、洪水、高潮、地震、津波、噴火その他の異常な自然現象により生ずる被害をいう」(1998年法律第66号 被災者生活再建支援法)。過去30年で世界の約2割。地震の発生率は世界4位 気象庁。

<sup>5</sup> 水垣渉 [わたる 1935-] キリスト教神学者。京都大学名誉教授。日本基督教学会前理事長。(社)神戸国際支縁機構設立理事。「憲法9条をノーベル平和賞に推す神戸の会」(略称 推す会)前代表。

<sup>6</sup> 『「自然」を神学する—キリスト教自然神学の新展開』(A.E.マクグラス 芦名定道、杉岡良彦、濱崎雅孝訳 教文館 2011年 273頁)。

<sup>7</sup> John Polkinghorne and Michael Welker, Harrisburg, Pa.: Trinity Press International, 2000。

理論物理学者であるばかりか、英国国教会の司祭でもある英国ケンブリッジ大学クイーンズカレッジ総長ジョン・ポーキングホーン[1931-2021]は、「宇宙が最終的に無になるという予言の意味を、私はきわめて深刻に受けとめたい。それは神への信仰を示すという言い方もあるが、私にはこの予言は、一人ひとりの人間が死ぬべき存在であるという、誰にとっても自明なことを言うのと大差はないと思われる。私は、たとえ種族や生命が不滅であるとしても、まして利己的遺伝子が不滅であるとしても、この世界の歴史の意味を理解するのに十分なものを示すことはできないと感じている。むしろ、炭素からなるすべての存在はいつか死ぬものである」と<sup>8</sup>。わたしは宇宙学に理性の優越性意識を汲み取る。

「光あれ」(אוֹר אֵל) イエヒー・オール *uiei owr*), と発した存在はだれなのか。神なのか、それとも自然なのか (創世記 1:3 『文語訳聖書』)。

ケンブリッジ大学の天文学者、物理学者ジョン・D・バロウは、「光の死」を予言する<sup>9</sup>。

みなさんにビッグバン[宇宙大爆発]によって、宇宙は死ぬ運命にあるのか、それとも神が介入されるのか、論じ合ってもらいたい。

学生諸君に語る上で、単なる講<sup>homily = 説教</sup>解ではなく、わたし自身の宗教遍歴、つまり神観を語らせていただく。そのことによって、「復興」に共生していく願いがあることをご了解いただきたい。

## 目次

(1) 元の生活を返せ	3
a. 復興とは	3
b. スピリット—原因は神	4
c. 神の意志は中動態	5
(2) ハヤトログアとは	
a. オリゲネス～有賀鉄太郎～水垣渉	5
b. ハヤトログア  ヘブライ的な動詞的なものの考え方	6
c. ヘブライ的時間とは	8
(3) 神による仕上げ	
a. 空間は無限か  それとも有限か	10
b. 復活の奇跡はあったのか	11
c. 「田・山・湾の復活」	13

<sup>8</sup> Porlkinghorne, *Christian Belief/Faith of a Physicist*, chap.9. 『科学時代の知と信』(J.ポーキングホーン 稲垣久和、濱崎雅孝訳 岩波書店 1999年)の28ページ。ポーキングホーンは「無常と死とは、いつも人間が経験する世界の一部分を成している。さらに今日では、われわれはこの宇宙そのものが死すべき性質を持っていることを知っている。現在の宇宙と過去の宇宙とが違った外観を呈しているというだけでなく、最終的に何十億年も時間が流れた後で、宇宙は再び変化し、宇宙的崩壊の衝撃によって、あるいは絶えず膨張し続ける瀕死の宇宙の長々とした鳴き声の中で、終末を迎えるであろう。フランク・ティプラーの絶望的で信じがたい「物理的終末論」のシナリオも、この予測に伴う悲しみを緩和するものではない、というのが私の見解である。F.J.Tipler, *The Physics of Immortality*, Macmillan, 1995。

<sup>9</sup> 英国ケンブリッジ大学の天文学者、数理論理学者のジョン・D・バロウ[1952-]。著書『宇宙論大全—相対性理論から、ビッグバン、インフレーション、マルチバースへ』(バロウ 林一、林大訳 青土社 2013年 407-408頁)。「光の速さは変わるとする宇宙論……この視点によって私たちは、直接経験する空間と時間の次元の外に本当の自然定数を探そうに促される」と「光の死」の中で論ずる。同書の407-408ページ:「地球の表面のしかるべき部分を歩き回れば、40億年を超える古さの岩が見つかる。もっとも単純な種類の細菌はおおよそ30億年前からあり、現生人類は20万年前に出現した。地球と太陽系は、地球の表面にあるこうした岩よりそれほど古いわけではなく、その古さはおおよそ46億年だ。驚くべきことに宇宙の膨張からは、そのたった三倍の時間だけ—138億年前までさかのぼれば、時間もなく、宇宙もなく、何もなかったと思われるのである。

## (1) 元の生活を返せ

### a. 復興とは

復興というロードが福島第一原子力発電所に近づくにつれ、消えていく。神戸から持って来た二つのガイガーカウンターの警告音、モニタリングポストの高い数値、荒廃した浪江町、双葉町、大熊町、富岡町にはまだ厳重な警戒が必要である<sup>10</sup>。日本原子力学会は「燃料デブリ取り出しから最短でも100年以上経たないと土地を再利用できる状態にならない」と<sup>11</sup>。使用済み核燃料を再処理して新たな燃料とする核燃料サイクルはすでに破綻している。放射能性物質を含む汚染水の処理が近隣諸国だけでなく、多くの国々からも問題視されている。地底に埋めるといった高レベル放射性廃棄物の最終処分も、数万～数十万年を要する途方もない計画であり、埋め立てを受け入れる地域はまずあるまい。行政はコロナ禍、災害ハーザードマップ困難区域、帰宅困難地域指定を決めている。そのことによって、「災害」に対する備え、対策、対応など、民間が行なうことは、それぞれの地域の役所の下働きに終始しているだろう。政・官・財・学・およびメディアも情報入手は「官」に頼らざるを得ない。「防災」についても民間の有志による創意工夫もほとんど取り上げられることなく、「官」主導である。制度に依存し、回避策を私たちはお上に丸投げしている。ところが、被害にあった悲運は自己責任で乗り切るしかない。先進諸国も脱原発に舵を切っているにもかかわらず日本は再稼働の青写真が現実味を帯びている。一部が反対しても再稼働、ダム建設、炭素利用など、天文学的数字の犠牲を出しても司法、立法、内閣は突き進んでいる。民の基本的な人権を擁護する基準とも言える憲法も改正されようとしている。法律と憲法は異なる。後者は権力の横暴を抑止する機能である。それを守ることを宣誓して職についた公務員ですら、トップダウンのヒエラルキー社会の従順な下僕となっている。体制を支える官尊民卑になっていることに気づかない精神的な心筋梗塞状態にある。

南海トラフ地震、富士山噴火、森林管理放棄による相次ぐ土石流など決して楽観はできまい<sup>12</sup>。

「防災」、「災害」(復旧)は後手にまわってきた。三つ目の「復興」も一人ひとりが真剣に考えないと日本列島は文字通り地球儀から水没してしまうだろう。では、復興とは何か。ボランティア道<sup>13</sup>を通じて、わたしは、変形、破壊、消失の状態を元の形、あるいは位置に復帰させようとする働きを「復興」と呼ばせていただいている。

一般的に、リコンストラクション reconstruction が用いられる。しかし、レストレーション restoration である<sup>14</sup>。なぜか。スピリチュアル(精神的)な面が回復されることが復興において、建造物、街並み、震災遺構より大切だからである。その本質に迫ってきたい。

復興においてエンパワメント(元々もっている能力を向上させること、有力化)や、レジリエンス

ボトムアップ resilience (強靱さ・しなやかさ・回復力)が強調されるが、「底点志向」のように「下からの参加」パーティシパトリー bottom-up participatory が有用なことは、2019年の六角川氾濫の際の佐賀県大町町の住民団結力でも証明されている<sup>15</sup>。住民たちの共同体意識を啓発するのは、地域に根付いた伝統的なスピリチュアリズムである。数字、マニュアル、机の上の計画では表れてこない「氣」、「鎮守の森」、「祭り」などの「精神」Spirit が回復の原動力となってきたのである。目に見えない存在である「精神」こそ「復興」のいのちと言えよう。

<sup>10</sup> 拙稿「第124次東北ボランティア報告」(フェイスブック 2021年11月17日)。

<sup>11</sup> 『政経東北』(東邦出版 2020年11月24頁)。

<sup>12</sup> 日本は不名誉なことに、世界有数の災害大国とみなされている。たとえばマグニチュード6.0以上の地震は全世界の20%が日本周辺で発生している。(内閣府「平成22年度防災白書」)。同資料によると、2011年3月11日に日本で起きた「東北地方太平洋沖地震」はマグニチュード9.0という日本の観測史上最大の地震であり、世界でも第4位になる超巨大地震であった。翌年以降の8年間でもマグニチュード6以上の地震発生回数も153回。地震の回数が特段増加してはなくても、巨大地震発生の可能性は常にある。

<sup>13</sup> 拙論「キリスト教とボランティア道」(第26回宗教者災害支援連絡会 東京大学 2016年)。拙論「ボランティア道—阪神・淡路大震災から20年」(ラジオ関西 2015年1月9日午後6時30分)。拙論『石巻へ行く』つじ野シリーズ ⑦(2017年10月3日付)。

<sup>14</sup> 英語 Reconstruction もよく用いられている。しかし、孤児、夫をなくした独身女性、高齢の独居者たちにとり、真の復興は心の部分が大いので、海外ボランティアに取り組む「カヨ子基金」では、Restoration を用いる。心の復興がボランティア道の生命線とも言える。

『心と社会 No.163』(窪寺俊之 日本精神衛生会 2016年 巻頭言)。1998年の世界保健機関(WHO)の常任理事会は健康定義を改訂してスピリチュアルな健康を加えることを決定した。残念ながら、翌年の総会にはこの議案は提案されなかった。しかし、WHOの専門委員会の報告書804号には、次のように書かれている。「患者は、霊的な面での体験を尊重され、これについての話に耳を傾けて聞いてもらえると期待する権利をもっている」(世界保健機関編、武田文和訳:WHO 専門委員会報告書 第804号。がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア—がん患者の生命へのよき支援のために。p49, 金原出版, 1993)。

<sup>15</sup> 拙論「ダムと伐(ばつ)―第5次佐賀水害ボランティア報告―」(「小さくされた人々のための福音」講座 神戸市勤労会館 2021年8月20日)。

## b. スピリット—原因は神

自然が損なわれた災害地は神の被造物と言えるか。一般に、人々は気候変動、自然災害など、人災と判断する。「みんなが『こうだ』と言う時『NO』と言えることが大事」と「男はつらいよ」などの映画監督である山田洋次[1931-]は言っている<sup>16</sup>。巨大な宗教組織にいつの時代も NO と反旗をひるがえした埋もれ草が存在する。エラスムス[1466-1536]、セバスチャン・カステリヨ[1515-1563]、オランダの哲学者スピノザ[1632-1677]の3人である。共通するのは「ネガティブ・ケイパビリティ」<sup>17</sup>である。ポジティブに世間の常識、エートス<sup>18</sup>、忖度を解さない変骨と言えるだろう。

2001年、わたしがエラスムス平和研究所“Erasmus Institute of Peace Studies”を立ち上げたのも、逆境の中にあっても、自説を曲げなかった3人の影響が起爆剤となっていただろう。

3人の生き様の中でも、今回はスピノザを取り上げたい。ユダヤ人スピノザは独学で旧約聖書の注釈家やユダヤ中世のマイモニデス<sup>19</sup>[1135-1204]などを研究。没後、スピノザ著の『ヘブライ語文法綱要』も発行された。1656年にユダヤ教を破門される。研究したルネ・デカルト[1596-1650]のように一時的な亡命者ではなく、キリスト教会からも……どこにもない「間＝差異」の世界に生きた<sup>20</sup>。スピノザはいかなる共同体にも帰属することのなかった特異な(singular)なコギト<sup>21</sup>であった。プロテスタント教会カルヴァン派に抗う匿名の著『神学・政治論』(1670)を発刊したため、四面楚歌になった。レンズ磨きをしながら、「神即自然」と唱えた。聖書中の奇跡を文字通りに信じないこともわざわざした。不運にもスピノザの神観は汎神論<sup>22</sup>とみなされたために各方面から非難合唱が起きた。しかし、正確には汎神論ではない。自然すなわち神のように、やおよぼす八百万の神様のような多神教と異なり、スピノザの神観は申命記6章4節「聞け、イスラエルよ。私たちの神、主は唯一 **יְהוָה** エハド *echad* の主である」を基点とする唯一神だったからである。

スピノザはあらゆる原因は神とみなした。「神は自己ならびにすべての物の原因である」と。(原書はラテン語『エチカ』<sup>23</sup>第一部定理34備考)。西方教会は一刀両断に汎神論を否定する。しかし、スピノザに言わせると、日本人が樹木、岩、河川を神として手を合わせることも、神の本性と力を表現していることにつながる。(エチカ 第一部定理36証明)。仏教者の唱える「山川草木悉皆成仏」という性状、形態、属性の発出は神であることになる<sup>24</sup>。「人災なら天地に生命を戻すことが人間の務めである」と言った田中正造[1841-1913]<sup>25</sup>や、神学者のパウル・ティリッヒ[1886-1965]も被造物が有する命が自然界にあると述べる<sup>26</sup>。ティリッヒの存在論と聖書の宗教の人格主義との間には緊張関係(tension)へ惹起されよう。

<sup>16</sup> 『赤旗』(2021年9月26日付)。

<sup>17</sup> 帯木蓬生[ははきぎ ほうせい 1947-] 小説家、精神科医によると、『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』負の能力もしくは陰性能力。「どうにも答えの出ない、どうにも対処のしようのない事態に耐える能力」。日本宗教学会第77回学術大会宗教における『宗教におけるケアとケア』の報告書で、倫理学会会長の宮本要太郎は、「ケアは、ケアする側とされる側がお互いに関わる『縁』として捉えられる。両者の思感を越えたところに成立する点で、ケアは超越的である。ケアとは、するものではなく、なっていく(生成していく)ものである(ケアの「境地」)。そこにふさわしいのは、positive capability ではなく、negative capability である」と。(『日台韓における社会的孤立者に対する宗教者の伴走型支援活動に関する調査研究』宮本要太郎 2020年 74頁)。

<sup>18</sup> エートスは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で有名な社会学者、経済学者であるドイツのマックス・ヴェーバー(ウエーバー)[1864-1920]によると、「ある民族や社会集団にゆきわたっている道徳的な慣習・雰囲気」。社会学者の村田充八[1951-]は、エトスとエートスの相違を述べる。エトスは単なる「習慣」、「慣例」、一方、エートスは、エトスが集積したもので、社会の「習慣的な性格」、「社会的な慣習、具体的な人間関係などの事柄を意味すると定義。『キリスト教と社会学の間』(村田充八 晃洋書房 2017年 202頁)。

<sup>19</sup> マイモニデス[1135-1204] 中世最大のユダヤ思想家・哲学者・医師。

<sup>20</sup> 『トランスクリティーク』(柄谷行人 岩波現代文庫 2010年 142頁)。

<sup>21</sup> デカルトの「われ思う・われ存り」(ゴギト・スム)に対して、マルティン・ハイデッガー[1889-1976]は、「sum cogito」(われ存在す、われ思惟す)と逆転することが必要である。そうすると、最初の言明は[sum]であり、しかも「われ世界の内にあり」という意味でのそれである。『存在と時間上』(ハイデッガー 細谷貞雄、亀井裕、船橋弘訳 理想社 1973年 346,347頁)。柄谷は、ハイデッガーが経験的な自我(存在者)に対して、無=存在であるところの超越論的自我を強調したと論じている。144頁。

<sup>22</sup> 森羅万象すべてを神とみなす思考。

<sup>23</sup> エチカ *Ethica* ラテン語の倫理学 英 *ethics* > 現代ギリシャ語 *ἠθική* イスイキ *thiki*, 古代ギリシャ語 *ἠθος* イーソス *ethosi* である。

<sup>24</sup> 『森の思想が人類を救う』(梅原猛 小学館ライブラリー 1995年 193頁)。梅原 猛[たけし 1925-2019] 哲学者。立命館大学教授、国際日本文化研究センター所長、「九条の会」呼びかけ人。中国仏教独自の思想「草木国土悉皆成仏」は、日本では空(774-835)が始めたと言われている。

<sup>25</sup> 『日本で神学する』(西原廉太、大宮有博 新教出版社 2017年 311頁)。

<sup>26</sup> 拙論「ダムと伐」(「小さくされた人々のための福音」講座 神戸市勤労会館 2021年8月20日 8頁)。

### c. 神の意志は中動態

スピノザが構想する世界はまず「中動態」の視座である。スピノザに言わしてみれば、「神は人を愛する」という能動態がない。中動態は、「人は神によって愛される」という受動態とも異なる。中動態とは、行為者の意志ではなく、神との関係が含意されている。大阪大学大学院人間科学研究科教授の渥美公秀は稲場圭信との共著『助ける』の中で、中動態についてわかりやすい例えを用いている<sup>27</sup>。「助ける」(能動態)でもなく、「助けられる」(受動態)でもなく、落としていた財布が自分自身の手許に運良く戻った、「助かった」ことを中動態と説明する。そこには、「行為者」が含まれていないのだ。動詞の「態」は、日本では、中学英語の授業で学ぶ。哲学者である國分功一郎によると、「中動態」には、『自然の勢い』が中動態の意味の根底にある」と。さらに、受動態によって担われるニュアンスにより、差異が明確になるという説明は意義深い<sup>28</sup>。國分の182ページに、「I appear」は能動態で、「I am shown」は受動態……能動対受動の対立図式がどれほど行為の帰属という観点に取り憑かれているかを実にわかりやすく示す……自発的に姿を現したのか、何かによって姿を現すことを強制されたのか、どちら」とあるが、appear は自動詞なので、つまり対格 accusative の object がなければ能動態としてみなすことはできない。また態転換ができないという基本が考慮されていないように思える。次ページにおいて、「見える」という動詞は「見る」という他動詞と対の関係にある自動詞だか、それが受動の意味から派生したものであることは明かである、と注解されている。この説明も不可解である。なぜなら、「見える」look, seem, appear は不完全自動詞として、主格補語を伴い、文が成立するからである。He seems +主格補語(=主語)の構造は、受動の意味から派生したとは言えないだろう。つまり主格補語に、対象となる名詞ではなく、形容詞が用いられることが無視されている。seem などの不完全自動詞は be 動詞に置き換えることも可能である。英文法学者 Hornby の Syntax[統語論]から國分説の一部についてわたしは腑に落ちない。

スピノザの神観は、復興を考慮する際、重要な示唆を与える。國分によると、スピノザの言う神は自らを刺激しつつ、刺激を受けることができる状態へと生成するという中動態的な過程のなかにある。そして、神、すなわちこの自然は無限であって、神に外から働きかけるものはいない。すなわちここに描かれているのは、中動態だけが説明できる世界である<sup>29</sup>。

言い換えれば、スピノザの言う神すなわち自然そのものを説明するにあたっては、中動態(内態)に対立する意味での能動態には出番がない。この世界には外がないのだから、その外で完遂する過程を示す態は必要ないのだ。神の意志についての神学を学んだことがない者にはハードルが高い文法であろう。

さて、「世界を神の被造物として認識する根拠はどこにあるのか」と神学者のユルゲン・モルトマン[1926-]は問うた<sup>30</sup>。世界が被造物と受肉するには、創造者である神との邂逅が転換点になろう。わたしの場合、「ハヤトロギア」により目からうろこがとれた。

## (2) ハヤトロギアとは

### a. オリゲネス～有賀鉄太郎～水垣渉

1990年、わたしの魂の導師である水垣渉に神戸改革派神学校ではじめて出会った。パウロの話し方についての説明が印象に残った。初代教父たちのロゴス論を砂地に水がしみ込むように、学んだ。水垣はパウロの如く自己を低みに立つ姿勢についてわたしに徹底的に打ち込んだ。アテネのアレオパゴス

<sup>27</sup> 渥美公秀[ともひで 1961-] 日本災害救援ボランティアネットワーク理事長。『助ける—人間科学2』渥美公秀 大阪大学出版会 2019年 7,8頁。

<sup>28</sup> 國分功一郎[こくぶん 1974-] 哲学者。東京大学大学院准教授。『中動態の世界—意志と責任の考古学』國分功一郎 医学書院 2020年 186頁。わたしは、拙論『I. C. S. 52 文型』の統語論に基づいて英語教育で生計を立てていた。“A Guide to Patterns & Usage in English” A.S.Hornby Kenkyuusha, Tokyo, 1956 p.69-70. 『英文構成法』佐々木高政 金子書房 1949年 48-52頁。

<sup>29</sup> 國分 243頁。

<sup>30</sup> 『創造における神—J.モルトマン組織神学論叢2』J.モルトマン 沖野政弘訳 1991年 90頁。

でパウロは知識と教養に満ちたメッセージで語った。しかし、コリントへ行く際は、まるで敗残兵のように、打ちのめされていた。「きょうだいたち、私たちがアジアで遭った苦難について、ぜひ知っておいてほしい。私たちは、耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失い、私たちとしては死の宣告を受けた思いでした」と(Ⅱコリント 1:8-9)。パウロは思索と思弁における自己の否定的自覚ゆえに、「おそらくは愚直に」と言わしめたほど否定の否定を貫くように変えられていた。つまり自分には知恵がないことを思い知らされ続けてきたと、告白するまでになっている。「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。神の裁きのいかに究め難く、その道のいかにたどり難いことか」(ローマ 11:33)において用いられている「究め難く」(ギリシャ語 ἀνεξιχνίαστος<sup>31</sup>)はパウロ流のスピリチュアリズムの原点である。パウロは、跡をつけて探し出すことの出来ない(探し出せない[測りがたい])ほどに、神の知恵の前に完膚無きまでに屈服していたのであり、それこそがパウロの生き様であった<sup>32</sup>。

水垣は、西方教会に連綿と受け継がれている思潮・傾向・導線について、わたしのロゴス論に軌道修正を迫った。パウロの信仰は、アウグスティヌス[354-430]<sup>33</sup>～宗教改革者マルティン・ルター[1483-1546]へと受け継がれた。アウグスティヌスの「原罪」観にはマニ教の残滓があった<sup>34</sup>。一方、オリゲネスは原罪が救いの喪失とは言明していなかった<sup>35</sup>。ものみの塔協会の主宰監督であったわたしがキリスト教会に戻ったものの二元論的罪悪感とは西方キリスト教ともものみの塔協会が同根だと気づき始めていた時期であった。水垣は京都大学の師である有賀鉄太郎[1899-1977]の『オリゲネス論』<sup>36</sup>解釈の後継者であった。そこで、ヨハネ～オリゲネス[182?-251]～有賀鉄太郎～水垣渉のロゴス論系譜自体は、わたし独自の解釈である。スピノザの神即自然、ティリッヒの神観への思潮がないだろうか、と専断した。有賀は、ギリシャ語 ὄν「オン」に対応するヘブライ語の「ハーヤー」をもとに「ハヤトロギア」という用語を造語した<sup>37</sup>。余談だが、オリゲネスは反ユダヤ主義の傾向にあっても啓典の民としてユダヤ教徒を擁護していた<sup>38</sup>。

## b. ハヤトロギア ヘブライ的な動詞的なものの考え方

水垣はヨハネの福音書1章1節に出ている「ことば」(ギリシャ語 λόγος *logos*)について注<sup>commentary</sup>解を述べた<sup>39</sup>。

<sup>31</sup> アネキシクニヤストス *anexichniastos* (＜否定 ア+ エクシナゾー *exinazo* 跡をつけて探し出す＜イクノス *ichnos* 足跡)。

<sup>32</sup> 水垣渉『思考者パウロとその高揚した語り』(「途上」第28号 思想とキリスト教研究会編 2013年 23-24頁)。

<sup>33</sup> 拙稿「アウグスティヌスの生涯と信仰」(キリスト教と人物 KBH 2005年)。禁欲的修道士ペラギウス[360頃-420頃]主義との比較を論じた。

<sup>34</sup> キュンク『キリスト教 本質と歴史』(H.キュンク 福田誠二訳 教文館 2020年 427頁 以下「キュンク」)。ハンス・キュンク[1928-2021] カトリック神学者。1970年にローマ教皇無謬論に異論“*missio canonica*,”ミシオ・カノニカ＜教会の任命の意＞1979年教皇庁教理省は神学教授としての任命を撤回]の資格剥奪。宗教の統一を目指して「世界のエトス」を提唱。聖職者の独身制をクリティック[批判]。本書427ページで、キュンクは語る。老年のアウグスティヌスはペラギウス主義に対する過剰反応から神話的でマニ教的な考え方を継承していた。わたし岩村は、2012年8月 26日から4日間の第8回世界宗教者平和会議で、キュンクと話す機会があった。拙論『解放の神学とは何か』(神戸国際キリスト教会 2021年5月2日 3-4頁)。

<sup>35</sup> オリゲネスは神学史の中では、二級の地位であった。異端の烙印を押された。東方教会では排斥され、西方教会ではアウグスティヌス、トマス・アキナスの輝きに隠されていた。『キリスト教思想の形成者たち—パウロからバルトまで』(ハウス・キュンク 片山寛訳 2018年 63頁)。

<sup>36</sup> 「永遠のロゴス即ちロゴス自體は如何なるものであるかと云うに、それこそ『存在する凡てのものの眞理であり生命である』ところのものである。そのロゴスこそ神の像であり、永遠の生誕による永遠の御子であり、第二の神である。ロゴスは又神でさへある—ὁ θεός ではないが、θεός と呼ばれてゐる』(『オリゲネス研究』有賀鉄太郎 全国書房 1946年 384頁)。

<sup>37</sup> 『有賀鉄太郎著作集 四』(創文社 1981年)。*Hebrew dictionary, Eliezer Ben-Yehuda, 1908* によると、「ハーヤー」(*hayah*)の未完了形 = 「エヒエ」持続しつつ進行しつつあるアスペクト 1. ある、存在する(*to be; to exist*) 2. なる、おこる (*to become; to come to pass*)である。ギリシャ的な「ハヤ・オントロギア」*haja-ontologia* ギリシャ的なもの(オントロギア)と結びついたハヤトロギア。ハヤ・オントロギア⇒ハヤトロギア。『初期キリスト教:聖書—靈性—思想』(水垣渉 日本聖書協会「聖書セミナー」委員会 2006年 171,183頁)。

<sup>38</sup> 教父たちは、なおも一貫してユダヤ教の教師たちからヘブライ語と聖書積義学を学び続けており、そして、学問的に最初の専門的なキリスト教神学者である、天オオリゲネスがユダヤ人のもとアレキサンドリアの要理学校の校長として生存していた。たとえ彼が説教の中でユダヤ人がメシアであるイエスを拒否したことに對して彼らを激しく非難したとしても、彼はユダヤ人に対する友情を保持し、異教徒から彼らを擁護していた。(キュンク 285頁)。

<sup>39</sup> 「キリスト教のことばはどのようなことばか?」(水垣渉 日本聖書協会 2009年6月4日)。岩村は2003年から2013年までの10年間、日本聖書協会主催の聖書セミナーの委員長を務めた。大貫隆、本田哲郎、手島勲夫、山内一郎、春名純人、勝村弘也、雨宮慧、橋本昭夫、村田充八、樋口進、近藤剛、辻学、新免貢、春名純人、安田吉三郎、鍋谷堯爾など聖書学者、神学者たち62名以上に及んだ。120分×5週=600分かけて神学、哲学、文学を語ってもらった。『手を携えて』(KBH10周年記念誌編集委員会 神戸新聞総合出版センター 2013年 30-33頁)。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」(ヨハネ 1:1)<sup>40</sup>。ギュツラフ訳『約翰福音之傳』、ベッテルハイム訳『約翰傳福音書』では、ロゴスを「カシコイモノ」<sup>41</sup>、ヘボン訳は「道」と訳出されている。「主はその道の初めに私(=知恵)を造った いにしへの御業の始まりとして」(箴言 8:22)。「万物の制作者、知恵に教えられたからである」(ソロモンの知恵 7:22)、と。ここでは知恵が万物の製作者である。ギュツラフはヨハネの福音書のロゴスは知恵と判断して、「カシコイモノ」と訳したと考えられる。つまり「ロゴス」=「ことば」<sup>ワード</sup> **word**と性急に判断しない <sup>ことわり</sup>理 があった。オリゲネスは積義書で述べた。「『元 <sup>はじめ</sup>のうちに <sup>はじめ</sup>言理 <sup>はじめ</sup>があった』<sup>ロゴス</sup>』<sup>ロゴス</sup>』<sup>はじめ</sup>というその「元」は、知恵のうちに、ということです。つまり、彼は、万物についての観念と概念の総体として、知恵とみなされ、この観念を、<sup>ロゴス</sup>言理に与っている者らに伝達するものとして、<sup>ロゴス</sup>言理とみなされます、と<sup>42</sup>。ロゴスを単なる「語」と考えると理解できない。

ロゴスの前にある日本語にない定冠詞の「ホ」は何を意味するか<sup>43</sup>。既知のもの、その場の状況によって何を指しているかすでに了解されているものである。ヨハネの福音書 1 章 1 節 a をヘブライ語に訳出すると、**בְּרֵשִׁית הָוְיָהּ הָדַבָּר** ベレーシート・ハーヤー・ハッダツバール *be-reshiyth hawyeh ha-dabar* となる。「言葉」と訳されているギリシャ語ロゴスには、word[単語]という意味はない。「まとまった発言」の意である。ヘブライ語 **דָּבָר** <sup>ダーバル</sup>の意には、① 言葉、② 事柄がある。中動態論の用法で考えると、「意志」が関係してくる。「初めにダーバルがハーヤーした」とは、神の意志により「言葉によって成った」の意である。つまり「成った」は「創造される」と考えられよう。日本語の「～される」は、学校で習うように、「尊敬・自発・受身・可能」の助動詞である。「創造される」には、「敬語」(信仰ゆえに)、「自発」(自然の勢い)、「受身」(被造物への行為)、そして「可能」(全能性)のニュアンスがあろう。新約における「ロゴス」についても、ヘブライ的な動詞的なものの考え方、発想、理解が求められる。「事の起こる前に、今、言っておく。事が起こったとき、『私はある』ということ、あなたがたが信じるためである」(ヨハネ 13:19)の「私はある」はギリシャ語エゴ・エイミである<sup>44</sup>。出エジプト記 3 章 14 節 **אֶהְיֶה אֲשֶׁר אֶהְיֶה** エヘイエ・アシエル・エヘイエ *Ehyeh-Asher-Ehyeh* との関連を想起する方も多いことだろう<sup>45</sup>。

有賀は、「我は有て在る者なり」(『文語訳聖書』)について「あらしめる」という神観を説いた<sup>46</sup>。本稿の目的は、復興である。宇宙の起源と終末への深慮と共に、「時間」と「空間」は看過できない。オリゲネス、

<sup>40</sup> **Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν, καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος.** エン アルケイ エイン ケ ログス ケ ホ ログス エイン プロス トン セオン ケ セオス エイン ホ ログス *en arche en ho logos kai ho logos pros ton theon kai theos en ho logs* 「あった」was 「エイン」=「エイミ」*eimi* の未完了形過去進行形である。直訳だと「ありつつあった」。

<sup>41</sup> 1837 年、近代プロテスタントによる最初の日本語訳。カール・ギュツラフ[1803-1851] 中国宣教に従事したドイツ人宣教師。ギュツラフ訳『約翰(ヨハネ)福音之傳』(1837 年)。バーナード・ジャン・ベッテルハイム [1811-1870] 英国の宣教師で医師。1846~54 年の間、那覇で伝道した日本最初のプロテスタント宣教師。断片『バレット写本』(1591 年) が日本で最古。『キリシタン研究 第 7 輯』(吉川弘文館 1962 年)。拙稿『神戸と聖書』(神戸新聞総合出版センター 2001 年 15 頁)。

<sup>42</sup> 『ヨハネによる福音書』(オリゲネス 小高毅訳 創文社 1984 年 55 頁)。

<sup>43</sup> 1 章 1 節 c の **θεός** 神「セオス」に定冠詞がついていない。無冠詞のギリシャ語は、「非特定」、「性質」、「特定」がある。いずれと判断する根拠については、拙論「キリストとはだれか」5『目葉』誌 No.31 (2003 年 1-14 頁)参照。

<sup>44</sup> ヨハネの福音書 13 章 19 節 **ἀπ' ἄρτι λέγω ὑμῖν πρὸ τοῦ γενέσθαι, ἵνα πιστεύσητε ὅταν γένηται ὅτι ἐγώ εἰμι.** アプ アルティ レゴウ ユミン プロトゥー ゲネスサイ イナ ピステューエイテ オタン ゲネイタイ オティ エゴウ エイミ *ap arti lego humin pro tou genesthai hina hotan genetai pisteusetes hoti ego eimi.*

「よくよく言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」(ヨハネ 3:3)。**Ἀμὴν ἀμὴν λέγω σοι, ἐὰν μὴ τις γεννηθῆ ἄνωθεν, οὐ δύναται ἰδεῖν τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ.** アメイン アメイン レゴウ ソイ エアン メイ テイス ゲツネイ セイ アノウセン ウー ドウナタイ イデイン テュイン バシレイアントウー セウー *amen amen lego soi ean me tis gennethe anouthen ou dunatai idein ten basileian tou theou* 冒頭の「よくよく言っておく」アメイン アメイン レゴウ ユミン *amen amen lego humin* (ヨハネ 13:20) で出ている「アーメン」とギリシャ語 **λόγος** ログス *logos* の冒頭の「ロゴス」の関係はコトバとマコトの関係で言うてもいいだろう。つまり、「主の言葉によって御業は成り(御旨のままに定めが実現した)At God's word were his works brought into being.」(シラ書 42:15)と聖書の言葉が実現するだろう。[そのように、私の口から出る私の言葉 *dabar* も、空しく私のもとに戻ることはない。必ず、私の望むことをなし 私が言出したことを成し遂げる *tsalach*](イザヤ 55:11)。参照:イザヤ 26:12, フィリピ 2:13。

<sup>45</sup> 「私はいる、という者である」エヘイエ・アシエル・エヘイエ *Ehyeh-Asher-Ehyeh* は、新約の **ἐγώ εἰμι ὁ ὢν** エゴ・エイミ・ホ・オーン *ego eimi ho on* (ヨハネ 8:58)が同じであり、新約のイエスは、旧約のヤハヴェと同じ本質である。オンはエイミの現在分詞(男性、単数、主格)+ホ 定冠詞⇒実体化し(「常に」在る者)。=出エジプト 3:14。拙論『神のみ名は「エホバ」か』(いのちのことば社 1998 年 28,29 頁)。

<sup>46</sup> 『キリスト教思想における存在論の問題』(有賀鐵太郎 有賀鐵太郎著作集 4 1981年 272-274 頁)。

スピノザ、有賀が対決したヘブライ語、ギリシャ語原語の「<sup>ことわり</sup>理」にこそ人類に与えられた照明と、わたしは考える。ディスタクシオン<sup>47</sup>(distanciation)の思索に、有益だからである。

ロゴス論で、決定的なロゴス理解が問われている。聖書におけるロゴス(まとまった発言)は、ヘブライ的なハヤトロギア思考に直結する。神が万物を創造したならば、神関係をもたない存在はない。すべては神関係的と言えよう。「ひと—もの」、「ひと—ひと」、「もの—もの」などどの関係も神関係をもっている。哲学者のキェルケゴール[1813-1855]は著書『死にいたる病』<sup>48</sup>で、自己とは自己自身に関係するところの関係であり、関係は関係自体に関係すると語った。スピノザが述べるように、神は「すべてのもの」に含められるのではないが、すべてのものは神に関係しているのである。『神は万物を、その足元に従わせた』からです。『万物が従わせられた』と言われるとき、万物(πάντα *panta*)をキリストに従わせた方がそれに含まれていないことは、明らかです、とある(Ⅰコリント 15:27)。万物というならば、神を含めない論理は成り立たないと考える。万物が神と考える汎神論ならともかく、神を万物に含めないことは非論理的であろう。わたしは言葉を越える境目までいつも戦ってきた。

「私はお前たちを知らない οὐκ οἶδα [ウーク オイダ *ouk oida* <「関係がない」の意>]」(マタイ 25:12)、と神が死の宣告をくださった、と怯えていた<sup>49</sup>。「信頼して歩みを起こすことができない私をお助けください」、という祈りが聞かれている自信がなかった。しかし、1992年、イスラエルの修道院で、自己の腐った霊性が隠修者(ere<sup>エレ</sup>mit)<sup>50</sup>を見た。ふかふかのベッドに身が私の魂が沈んだ。緊張もない感覚が走った。そのとき、わたしはハンナのようにひとりで立った(Ⅰサムエル 1:26)。「信じます」、と行為遂行的発言を放っていた。

神との邂逅した召命の瞬間、つまり「時」は、過去、現在、未来のいずれであったのか。腕時計を持ち合わせていなかった。だから時間を超越する存在を黙想した。アウグスティヌスが言ったように、神が「時間の創造主」なのだろうか<sup>51</sup>。「時間」と「存在」のどちらも「永遠」、それとも「有限」なのだろうか。時間が存在する前に、神は永遠に存在していたとするなら、ヨシュアの行動が思いによぎった。「太陽よ、ギブオンの上にとどまれ 月よ、アヤロンの谷にとどまれ」(ヨシュア 10:12)にある太陽、つまり「光」が停止したとは地球の運行が止まったのか。時計の「時間」は刻まれていたにちがいない。世界観 Weltanschauung<sup>ヴェルターアーンシヤアウウン</sup>が変わる予徴が全身を覆った。

### c. ヘブライ的時間とは

ヘブライ語のもつ動的表現、ギリシャ語の静<sup>スタティック</sup>的表現の根底を越えることを、神学で受肉と言うのではないか。ヘブライ語の「言葉」は דָבָר <sup>ダー</sup>ダバル *dabar* である。ダーバルは出来事を意味する。つまり、「神は愛である」という静的より、「神は愛する」行為が貫かれている<sup>52</sup>。

「万物は言によって成った。言によらずに成ったものは何一つなかった」の「成った」(ギリシャ語 ἐγένετο <sup>エゲ</sup>エゲネト *egeneto*)のリアリティーは統一的コンプリヘンシブ<sup>53</sup>と言えまいか(ヨハネ 1:3)。ヘブライ

<sup>47</sup> フランス語 *distanciation*, 英語 *alienation*(遠ざけること, 疎外, 疎外感, 差異化, 異化, 距離を置く事。プレヒト[1898-1956](20世紀を代表する独の演劇家)が用いた(異化効果 *Verfremdungseffekt*)に由来する。語義からいえば作品の対象をきわだたせ、異様(常)にみせる手続をいう。中国語 間離化, 陌生化。

<sup>48</sup> 『死に至る病』(キェルケゴール 齋藤信治訳 岩波文庫 1992年 20-21頁)。共産党に転向した赤岩栄[さかえ 1903-1966]牧師は、カール・マルクス[1818-1883]とそれより5年前に生まれたセーレン・キェルケゴールは観念ではなく、他者である神を信じていた。二人(マルクスとキェルケゴール)里山に出入りする先祖、親、村人と結びついてきた目に見えないものである。気配を感じるころの「氣」である、と。参照:『赤岩栄著作集』(赤岩栄 教文館 1971年 206頁)。

<sup>49</sup> 拙稿『目薬誌 No.25 (2002年 11頁)参照。

<sup>50</sup> エレマイトは神を見る、つまり神の観照(Vision [contemplation] of God)のために誓願を立てた修道士 monk。

<sup>51</sup> 『告白』(下)『アウグスティヌス 服部英次郎訳 岩波書店 1995年 142頁。神が時間の永遠の創始者ならば、時間がない時代に万物を創造したという「永遠生」は、創造という行為も永遠にひたされ続けることにはならないのか、と疑問が、カール・バルトの教義学へ探究を向かわせた。バルトの新しい予定論では、オリゲネスを想起させるキリスト教的普遍主義へと「正場」されている。(キェンク『キリスト教思想の形成者たち—パウロからバルトまで』295頁)。

<sup>52</sup> 拙稿『目薬誌 No.23 (2001年 3,5頁)参照。

<sup>53</sup> 拙論『福音主義神学』No.31(福音主義神学会 2000年 127-134頁)。聖書の伝統における聖書の連続性と多様性における統一性。たとえば、



語とギリシャ語の合体, 言葉と行為の合体, 科学と神学の合体である。科学は「どのように」と問う人に理性で説く。一方, 神学は「なぜ」という人に真理を説く。わたしがどのように, なぜ「時間」に懐疑的な視座をもつようになったかは, 宗教遍歴に因を発する<sup>54</sup>。

ヘブライ人の時間意識は, 西側諸国とは著しく差異がある。英語, ドイツ語, フランス語など幼い時から会話し, 時制の文法を学び, 「時間」を常に意識した生活があるだろう。仕事, 他者との契約, 計画についても, 未来の出来事はこれからのこととして理解する。宇宙を変えるのは観念ではなく出来事である<sup>55</sup>。

イスラエルでは, 神聖な宗教的時間は月の変化や運動によって規定される。時間的指示者としての天体の光は人間に時間を客観的に規定させるとともに, 人間に種々の感情をひきおこす。人間の主体的な時間感情は天体の光に相応する。わたしたちは宮城県石巻市渡波で 10 年にわたり, トロトロ層づくり, 田植えから稲刈りまで, お天道様任せである<sup>56</sup>。ネオニコチノイド系農薬を使わない無農薬, 有機栽培にしても, 稲穂が実るかどうかはすべて天恵による<sup>57</sup>。2011 年 10 月 16 日, 古今未曾有の大津波で, ヘドロもかぶった田んぼにくわをもって挑んだ。「荒れたままにされていた地は, そこを通るすべての人の目に荒れ果てた地としか見えなかったが, 耕されるようになる。そこで人々は、『荒れ果てていたこの地がエデンの園のようになった。廃虚と化し, 荒れ果て破壊された町に城壁が築かれ, 人の住む所となった』と言う(エゼキエル 36:34,35)。コンバインなど農業機械を一切, 使わない農法がここに存在する。

ノルウェーの聖書学者ボーマンはヘブライ語のハヤーは「ある」だけでなく, 「成る」の意味を含むことをつまびらかにした<sup>58</sup>。ギリシャ的思惟が静的であるのに対し, ヘブライ語的思惟は, 「通例三音字 (triliterale) の基本形をもち, この三音字に根本的意味がある。これに種々の母音を添えることにより, また接頭語, 接尾語を付加することにより, 種々の品詞の数多くの単語ができ, 個々の単語の変化形式が多数つくられる。……ヘブライ人が動詞を基本とする思惟に立っている。「ヘブライ人にあるのはほとんどすべてが動詞である」<sup>59</sup>。ロゴスは, ギリシャのアレティア(真理)の概念ではない。それは確かなもの, 約束を守るもの, 威嚇を実行するもの, そして最後には約束を果たすものという概念である<sup>60</sup>。

「アツバ」マルコ 14:36, ローマ 8:15, ガラテヤ 4:8。

<sup>54</sup> わたしは, 語学を教えて現も生活をつないでいる。ヘブライ語, ギリシャ語こしてもアルファベットから始めた。独学で修得した。決して専門家ではない。資格もない。一応教師である。文の探究に有益であったという他はない。26 歳, 世界最大の宗教と言われるローマ・カトリック教会に断絶届けを出した。39 歳, 世界最大の異端グループと言われるものみの塔聖書冊子協会にも断絶届けを出した。44 歳で牧師として歩み出してからも語学教師として乏しい収入でくいつないでいる。「きょうだいたち, あなたがたは私たちの労苦と骨折りを覚えているはずです。私たちは, 誰にも負担をかけまいとして, 夜も昼も働きながら, 神の福音をあなたがたに宣べ伝えたのでした」(I テサロニケ 2:9)。「親族, 特に家族を顧みない者がいれば, その者は信仰を否定しているものであり, 信仰のない者よりも悪いのです」に書かれている通り, 誰にも負担をかけず, 家族を養うためパウロのように天幕づくりしながら宣教してきた(I テモテ 5:8)。

4 世紀頃に地中海沿岸でできたキリスト教, とりわけ初代教父アウグスティヌス[354-430]たちによってできた「キリスト教」(聖書にない言葉クリスティアニスム)は有給の聖職者を作った。一方, 初代教会では, 「また, 誰からもパンをただでもらって食べたりしませんでした。むしろ, 誰にも負担をかけまいと, 労苦し骨折って, 夜も昼も働いたのです」と書かれている(II テサロニケ 3:8)。牧師会, 司祭たちの同僚と異なる方法で教会を続けてきた。時間に追われる日々であった。「神の恵みによって, 今の私があるのです。そして, 私に与えられた神の恵みは無駄にならず, 私は他の使徒たちの誰よりも多く働きました」(I コリント 15:10)。「時間が無い」生活に, 仲間の牧師, 教会の信者, 周囲からゆとりがないと揶揄されている。

<sup>55</sup> 『人間の条件』(ハンナ・アーレント 志水速雄訳 ちくま学芸文庫 2014 年 435 頁)。

<sup>56</sup> 『石巻日日新聞』(2021 年 5 月 26 日付), 『河北新報』(2021 年 9 月 25 日付), 『牡鹿新聞』(2021 年 11 月 12 日付), 『人吉新聞』(2021 年 11 月 12 日付), 『熊本日日新聞』(2021 年 11 月 13 日)。

<sup>57</sup> 「私はあなたがたの地に, 秋の雨や春の雨など, 必要な時期に雨を降らせよう。あなたは, 穀物, 新しいぶどう酒, 新しいオリーブ油を収穫するだろう」(申命記 11:14)。レビ記 27:30, ホセア 10:12。

<sup>58</sup> 『ヘブライ人とギリシャ人の思惟』(ボーマン 植田重雄訳 新教出版社 1984 年 208 頁) AGST(アジア神学大学院 Asia Graduate School of Theology で 1998 年, 聴講している際, 鍋谷堯爾教授[1930-]は, カール・バルト著作全集ばかりか, ボーマン[1894 生まれ]を読む用にわたしにプレゼントした。さらにハイデッガーの『存在と時間上下巻』は, 「みんなで『死』を考える会」発足の真理契機になった。鍋谷が寛大に親心で手渡した書籍はわたしの神学的営為の援用, 検索, 確認に大きく寄与してきた。たとえば, 黙示録 1 章 8 節の「今おられ[ホ・オン *ho on* 過去], かつておられ[ホ・エイ *ho en* 現在], やがて来られる方[ホ・エルコメノス *ho erchomenos* 未来], 全能者である神, 主がこう言われる。『私はアルファであり, オメガである』の三時法定式である。ヘブライ語「エヒエ」の時制は, 過去, 現在, 未来の三つの時制になる。

<sup>59</sup> 『ヘブライ詩の精神』の中で, ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー[1744-1803]は動詞の中心的位置を述べる。

<sup>60</sup> 『ティリッヒ著作集 第 6 巻』(ティリッヒ 大宮 博訳 白水社 1979 年 207 頁)。

「主は恵み深く、主の慈しみはとこしえに。そのまことは代々に及ぶ(詩編 100:5)<sup>61</sup>。慈しみは「とこしえに」(לְעוֹלָם לְעוֹלָם leowlam 「に」(לְ le 前置詞「〜へ、までの意 英語の to」))とあるので、現在から未来へ向かっていつまでもとわかる。一方、「owlam オーラーム」は、「遠い昔」を表す場合にも用いる。「昔の日々を思い出し、代々の歳月を顧みよ。あなたの父に問えば、答えてくれる。長老たちも、あなたに話してくれる」の「昔」は「オーラーム」である(申命記 32:7)。時間を永遠と考える思考は、ヘブライ語ではなく、ギリシャ思想の影響であろう。では、空間は無限なのだろうか。

### (3)神による仕上げ<sup>62</sup>

#### a. 空間は無限か それとも有限か

ドイツ生まれの 20 世紀最高の物理学者。アルベルト・アインシュタイン[1879-1955]は、1905 年に相対性理論(略して相対論)<sup>63</sup>やブラウン運動を提唱した。彼が時間の減速や、時間の流れは、山では速く、低地では遅い、と言った時、人々は半信半疑であった。アインシュタインは、「私が信じるのは、人間の運命と行為にかかわり合う神ではなく、すべての存在の調和において証明されるスピノザの神である」、と<sup>64</sup>。

相対論にしても量子論にしても、科学的証明には至らなかった。古代ギリシャのヘラクレイトス[紀元前 540 年頃-紀元前 480 年頃?]、アリストテレス[紀元前 384-322]やプラトン[紀元前 427-347]たちは「できごとの世界」の観察から論じた。プラトンは、時間に封印をして、肉体を脱ぎ捨てた後の永遠のアイデアに注視した。したがって、ギリシャでは、完全な円、普遍の調和、純粋な数など静的な抽象概念が発達し、思想、哲学、不変性なる美を探究した。プラトンは、間違っていたと、イタリアの理論物理学者カルロ・ロヴェッリ[1956-]は、著書『時間は存在しない』で述べている<sup>65</sup>。プラトンが変化を無視し、世界を出来事ではなく物との関係で理解しようとしたからと反論した。プトレマイオスからガリレオへ、ニュートンからシュレディンガーによる物理学や天文学は、物の状態ではなく、物の変化を数学的に記述している。実は、物の状態ではなく、「出来事」(ダーバル)の起き方に着眼していたと言う。

近代科学の誕生に大きく貢献した人物を選ぶとすると、英国ケンブリッジ大学の天文学者、数理物理学者のジョン・D・バロウ[1952-]をあげることができよう<sup>66</sup>。他には、イタリアのガリレオ・ガリレイ、科学的手法をとった哲学者フランシスコ・ベーコン、天文学者ヨハネス・ケプラー、アイザック・ニュートン、そしてロバート・ボイルやロバート・フックら王立協会の創設者などがいる。

リスク社会論のドイツの社会学者ウルリッヒ・ベック[1944-2015]は、「ローカルリスクとグローバルリスクの間の選択の危険性のこの『時空間ディスタンクシオン』(Harvey※ 1989)は、グローバルリスク社会の診断を裏付けている。世界的な脅威により、確立されたリスクロジックの基盤が損なわれ、無効化され、計算可能なリスクではなく、制御が困難な危険のみが存在する世界が生まれた」、と述べている<sup>67</sup>。

<sup>61</sup> 『詩篇』勝村弘也 日本キリスト教団出版局 1992 年 11 頁。勝村は、346 ページで、「月が打つ」という観念は、現代人にはわかりにくいだが、近代の科学的な考え方が浸透する以前には、世界中で月が人間に悪い影響を及ぼすことがあると信じられていた。……周期性をもつ熱病やてんかんは、月の影響で起こるとされることがあるし、月光は夢遊病の原因であるともされる。月面を眺めることが不吉であると考えられていたことは、我国の「竹取物語」からもわかる、と。

<sup>62</sup> ヘブライ語「エヒエ」の時制は、過去、現在、未来の三つの時制になる。「あなたがたは私の証人 私が選んだ私の僕である 主の仰せ。あなたがたが私を知って、信じ それが私である אָנִי הוּא [アニー フー ani hu]と悟るためである。私より前に造られた神はなく 私より後にもない הָאֵל הַחַיָּהוּ [ハーヤー hawyah]」(イザヤ 43:10)。「それが私である」[アニー・フー]。拙論『神のみ名』144-145 頁。参照 申命記 32:39; イザヤ 41:4,43:13,46:4, 48:12。

<sup>63</sup> 運動している人と静止している人では時間や空間が異なると考えた理論、『宇宙の「果て」になにかがあるのか』戸谷友則 講談社 2018 年 28 頁。

<sup>64</sup> Naturgestze stern den Zufall, M.Eigen/R. Winkler, Das Spiel, München 1979 p.192。

<sup>65</sup> 『時間は存在しない』(カルロ・ロヴェッリ 富永星訳 NHK 出版 2019 年 101-103 頁)。

<sup>66</sup> 『サイエンス・イメージ』(ジョン・D・バロウ 桃井緑美子訳 青土社 2010 年 239-240 頁)。

<sup>67</sup> “World Risk Society” Ulrich Beck, Blackwell Publishers, 2000, p.142. ※イギリスのポストモダン地理学者デヴィッド・ハーヴェイ[1935-]による『(資本論)入門』は、近年、世界的なマルクスブームをリバイバルさせた。

マルクス主義哲学の斉藤幸平[1987-]は、著書で、アメリカの生態学的歴史学アルフレッド・クロスビー[1931-2018]が言い出した「生態学的帝国主義」(ecological imperialism)について、資本主義は自らの矛盾を別のところへ転嫁し、不可視化するというカール・マルクス(1818-1883)の環境危機について言及している<sup>68</sup>。

実際に、ペルシア湾での石油汚染・ダイオキシンによる土地汚染・森林の死滅・海洋汚染・動植物の種族死滅が起こっている。生態学的大破局 エコロジー・カタストロフを避けて脱出できそうもない宇宙船地球号は大気圏外のはるか向こうに向かうのか。

宇宙のはるか先には何が待ち受けているか。物理学者の終末論のドアを開けると、そこには希望はない。虚無なのだ。前述のポーキングホーンは預言する。「50億年後には、……宇宙は死にかかった腐朽のすすり泣きで終わるか、爆発を起こして宇宙大崩壊のつぼの中に溶解することで終わるか、それは科学的にこの上なく確実なことなのである」と<sup>69</sup>。ポーキングホーンは理論物理学者であるばかりか、キリスト教会司祭でもあることを忘れていただきたい。宇宙は、凍結か、焼結になる運命について、天文学者、物理学者の言う通りなら、キリスト教が説いてきた新しい天と地という終末論の解釈は夢物語になろう。「すると、玉座におられる方が言われた。『見よ、私は万物を新しくする。』また言われた。『書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である』の神の言葉はユートピア、夢物語、気休めにすぎなくなる(黙示録 21:5)。信頼性が乏しく、単なる妄想と糾弾されるかもしれない。言理(ロゴス)の言う「こと」は実現する可能性はどれほどか。復活、奇跡、超自然があり得るのか。

## b. 復活の奇跡はあるのか

現代科学が扱っている宇宙というのは、実験の中に現われる自然の行動に合わせて解釈される。作業上のリアリティに技術的に翻訳できる原理そのものに合わせて解釈されている。

存命中に男性の精子、女性の卵子を抽出し、凍結しておいて用いることはできるだろうか。科学者たちはサイバネティックス的<sup>70</sup>不死を主張する。日本学術会議の会員への任命を拒否された関西学院大学の芦名定道教授(京都大名誉教授)[1956-]は、「脳が神を生むのか、神が脳を動かすのか」という視点の中で、「一口で言うなら、心とは脳のこと」という米国の認知科学者ダニエル・デネット[1942-]を引用する<sup>71</sup>。神学者のヒックが心脳同一論をクリティック[批判]しているのを援用している<sup>72</sup>。人間の頭脳は心なのか。魂も脳と同一視できるのか。人間の頭脳のニューロンの動きを画像に描出できると科学者は考える。心の喜怒哀楽が映像で映し出されるのだ。それらのパターンをコンピューターにアップロードする。その基板をロボットにインストールする。人間の人格的同一性が完成し、寿命、アポトーシス(細胞の自然死)機能、病気など無関係に人間クローン、ロボット、人工知能が稼働する。不老長寿、人工復活、サイバネティックス

<sup>68</sup> 『人新世の[[資本論]]』斉藤幸平 集英社新書 2021年 47頁。生態学的帝国主義:周辺部からの略奪に依存し、同時に矛盾を周辺部へ移転するが、まさにその行為によって、原住民の暮らしや、生態系に大きな打撃を与えつつ、矛盾を深めていく。参照:『稲の大東亜共栄圏—帝国日本の「緑の革命」』(藤原辰史 吉川弘文館 2012年)。

<sup>69</sup> *The End of the World and the Ends of God: Science and Theology on Eschatology (Theology for the Twenty-First Century)* John Polkinghorne, Michael Welker, Bloomsbury T & T Clark. 地球上の命の存続を脅かしかねない多数の危険(大きな隕石の衝突、(地球という)惑星を致命的な放射線ですっかり浸す近距離で起こる超新星爆発、50億年後には太陽が赤色巨星に変わるといふ確実性)があるだけでなく、全宇宙そのものが最後には無用となるべく運命づけられているのである。宇宙は死にかかった腐朽のすすり泣きで終わるか、爆発を起こして宇宙大崩壊のつぼの中に溶解することで終わるか、それは科学的にこの上なく確実なことなのである。

John D. Barrow, Frank J. Tipler, *The Anthropic Cosmological Principle*, Oxford University Press, USA, 1988 p.340-341,658-659. 米国チューレーン大学で数学科と物理学科教授であるフランク・J・ティプラー3世[1947-]は、宇宙の終焉を考察し、オメガ点理論の発表、675-677。

<sup>70</sup> 1947年にアフリカの数学者N.ウィーナーによって提唱された人間のさまざまな機能、なかんずく精神現象の物質的基盤が明らかになり、また他方、電子工学の発展により、これらの人間的機能が電子工学的にモデル化されるに至り、人間機械論は格段に具体性を帯びることになった。

<sup>71</sup> 新無神論の4人の騎手 ①ダニエル・デネット[1942-]、②リチャード・ドーキンス [1941-] 英国の進化生物学者・動物行動学者。『神は妄想である—宗教との決別』(垂水雄二訳 早川書房 2007年)、(※自称『悪魔に仕える牧師』(2004年 ※ 岩村が書名に(自称を付記で「なぜ科学が神を必要としないか」を論述。とりわけアブラハム宗教(ユダヤ教・キリスト教・イスラム教)の人格神を否定、③サム・ハリス[1967-] 米国の神経科学者。④クリストファー・ヒッチェンズ[1949-2011] 英国の作家、ジャーナリスト。

<sup>72</sup> 『脳科学は宗教を解明できるか?』(芦名定道共 春秋社 2012年 27頁)。ジョン・ヒック[1922-2012] は、英国の宗教多元論の主唱者。

的不死が実現すると科学者は約束する。

神経生理学者たちは、側頭葉のある部分を刺激する。すると、てんかん発作、幻聴、幻視が起きる物理的な原因を解決できると研究を深める。電気化学的プロセスで医療、健康、長寿をもたらすというエートスが全世界を席卷している。各家庭、学校、社会はテレビ、視聴覚教材、DVDなどの映像を繰り返す。民衆はサブリミナル<sup>73</sup>の洗礼にさらされている。宗教の地獄などの教義は100年前に買収されてしまった。

科学者の宇宙の死という言説に従うか、それとも聖書の復活を信じるか。

「しかし今や、キリストは死者の中から復活し、眠りに就いた人たちの初穂となりました」(I コリント 15:20)。体なしには、復活という語を正当に用いることはできない。物理的身体性について、甦ったイエスは朝食に魚を「取って、彼らの前で食べられた」のである(ルカ 24:43)。

キリストの死と甦がえった空間の連続性について考えるなら、復活後に「同一性」<sup>アイデンティティ</sup>が一貫しているのかどうか。つまりキリストの復活の連続性に焦点をあててみよう。宇宙という空間が凍結するのか、焼結するという物理学者、天文学者、宗教者の言い分に応答する鍵は復活の奇跡にある、とわたしは考える。

奇跡は神の力が背後にある証明のため実行されるのではない。反自然ではなく、超自然という科学的認識でもない。奇跡は、痛めつけられた弱者、貧者、抑圧された民のために神が実現にいたらせる「光」である。

水垣は、「ハーヤー」=「あらしめる」(現在におりつつあるとともに、過去におりつつあったし、また未来にもおりつつある)は「ある」に先立ち、「ある」が含まれている。「あらしめない」こともできると注解する。

「光 あれ」<sup>Let there be light</sup>(**וַיִּבְרָא אֱלֹהִים**) の *uiei* イエヒーはハーヤー動詞<sup>4</sup>の命令形で、「存在せよ」とも訳せる<sup>75</sup>。つまり光が「ハーヤーせよ」とは、光が「成られなさい、実現されなさい、なるように」の意である。光が「ハーヤーせよ」を『セプトウアギンタ訳』は **γενεθίτω** ゲネイセイトオウ *genetheto* と訳している<sup>76</sup>。

では、光はいつからあったのか。また、無限なのか、消えてしまうのか。「この世は闇の中にあつて、そこに住む人々には光がありません」(エズラ[ラテン語] 14:20)、とどんなに栄耀栄華を極めていようと、「闇」は隠せない。光がなければ、いかなる創造もあり得ない。光こそが初めて、闇の中で溶解していた被造物にはっきりとした輪郭を与えたのである。……光もまた被造物にすぎない<sup>77</sup>。前述のイスラエルでの体験を話した際、「時間」の創造(*creatio in tempore*)とは、時間そのものの創造というよりも、神自身が創造する行為の「ことから」、すなわち「成った」(エゲネト)のリアリティーを認識すべきだろう。

西暦1世紀に、光のみならず、時間がどのようにゲネイセイトオウしたかの奇跡の最高潮を注視したい。

コリント前書 15章 42-44節に登場する **soma pneumatikon** は、<sup>ソーマ フニューマティコン</sup> 地上体 **sarx** や <sup>サルクス ソーマ プスキコン</sup> **soma psychikon** 魂の体とも異なる<sup>78</sup>。身体<sup>79</sup>がない「復活」は「復活」とは言えない。

「キリストは、肉では殺されましたが、霊では生かされたのです」(I ペトロ 3:18)、「キリストは肉において現れ 霊において義とされ」という聖句においても復活の様が証言されている(I テモテ 3:16)。「私はあなたがたの上に筋を付け、肉を生じさせ、皮膚で覆い、その中に霊を与える。するとあなたがたは生き返る」と神の霊が新しいいのちを与えると預言者エゼキエルに幻を与えた。したがって、霊は死を征服し、いのちを与える力である。「キリストは、弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力のゆえに生きておられる」(II コリント 13:4)、と。「死者の復活もこれと同じです。

<sup>73</sup> *subliminal* とは、心理学の用語で「識閾(しきいぎ)下の、潜在意識の」層に刺激を与える。一種のマインドコントロールと言えよう。

<sup>74</sup> ボーマン 55-79頁。ハーヤー動詞には、生成(独 *Werden*)、存在(*Sein*)と、活動(*Wirken*)の3つの主要な意味がある。

<sup>75</sup> 『BEREISHIS』Vol.1 Mesorah Publications, Ltd. New York, 1969 p.38-40。『創世記I』(ミルトス・ヘブライ文化研究所 1992年 13頁脚注)。

<sup>76</sup> ゲネイセイトオウは、**γίνομαι** ギノマイ *ginomai* 「成る」命令形。ギノマイは少なくともその形では存在しなかったものが存在するようになる(「生成する、生成した結果現に存在しているの意」)。

<sup>77</sup> 『ATD 旧約聖書注解1 創世記1-25章18節』(ゲルハルト・フォン ラート 山折哲雄訳 ATD・NTD 聖書註解刊行会 1993年 68頁)。

<sup>78</sup> 拙稿『目薬誌 No.25 (2002年 3-12頁)。

<sup>79</sup> 八木誠一[1932-] 神学者 身体とは肉体のことではなく、こころとからだの統一体としての全人格のこと。『一神教とは何か—公共哲学からの問い』(大貫隆共編 東京大学出版会 2006年 12頁)。

朽ちるもの(φθορά フソラ *phthora* <「腐敗したもの」の意>)で蒔かれ、朽ちないもの(ἀφθαρσία アフサルシア *aphtharsia* <「腐敗しないもの」の意>)に復活し、卑しいもの(ἀτιμία アティミア *atimia*)で蒔かれ、栄光あるもの(δόξη ドクセイ *doxe*)に復活し、弱いもの(ἀσθενεία アッセネイア *astheneia*)で蒔かれ、力あるもの(δυνάμει ドウナメイ *dynamei*)に復活し、自然の体(ψυχικόν プスキコン *psychikon*)で蒔かれ、霊の体(σώμα πνευματικόν ソウマ プニューマテイコン *soma pneumatikon*)に復活します(Ⅰコリント 15:42-44)<sup>80</sup>。

ここには、「力あるもの」と、神の奇跡が介入した状態が描写されている。「栄光あるもの」は、天的体(σώματα ἐπουράνια ソウマタ エプラニア *somata epourania*)という死者の体である(Ⅰコリント 15:40)。

新しい体に移行するためには、古い体は死ぬ。つまり、死の反対は「生」ではなく、「復活」である<sup>81</sup>。ヨハネの福音書 1章1節で、言理(ロゴス)はアルケ 初めである。つまり霊の初穂 アルケとして犠牲に捧げられた収穫の最初の実りであった(ローマ 8:23)。スイスの神学者バルト[1886-1968]はキリストの復活について「奇跡」と講解した<sup>82</sup>。

オリゲネスは述べる。「復活の後、『もはや[キリストは]死ぬことなく、もはや死はキリストを支配しない』(ロマ 6:9)からです。……[答えられるべきことは、ただ]言理(ロゴス)と肉体との不解消の一致によって肉体に属するすべてのことは言理(ロゴス)に帰され、同様に言理(ロゴス)に属することも肉体の内に[あるものとして]述べられる」と<sup>83</sup>。東京大学教授の宮本久雄[1945-]は、エゴ・エイミというハーヤーに収斂すると言う<sup>84</sup>。

イエスは2千年前に死んだままではない。キリストが復活したように、われわれも復活する。新しい復活である。全創造物の更新、「見よ、私は万物を新しくする」と(黙示録 21:5)。闇という *ex vetera* (古きものから)、光に(ヨハネ 8:12)。宇宙の物質のエスカトンへと昇華するのではない。

霊は命を与える。したがって、水没するセイシェル、キリバスなどの「死都」になる地球。宇宙物理学者が言うように、ビッグバンに飲み干される星雲、感覚をもっている生物が死に、バクテリアによって腐敗、跡形もなくなるように宇宙は死ぬと天文学者、物理学者、科学者たちは強弁する。しかし、ぼんやりではあるが、「遥かにそれを望み見て歓呼の声をあげ、自分たちが、この世では異邦人であり、旅人にすぎないことを表明しました」というマイノリティー(少数者)がいる。「遥かに」(πόρρωθεν ポッロウセン *porrothen* <πόρρω 「遠く離れて」の意>)とは、時間だけではなく、「空間」を創造された方の意志に生き様の波長を合わせている(ヘブライ 11:13 『フランシスコ会訳』)。その軌道に乗っかるとどうなるか。

### c. 「田・山・湾の復活」

キリスト教会は、魂の救いのみを教える福音の救済論的意味に閉じ籠もってきた。十字架の恵み、罪の赦し、永遠の命ばかり、何万回も繰り返す教え、信じ込ませ、盲信・軽信させてきた。魔女狩り、十字軍遠征、異端審問により、流血の罪を負ってきた。20世紀における世界大戦、原爆、紛争とも決して無関係、潔白、無実とは言えない。良心の危機を迎えている。自然と社会の回復に繋がる福音の壮大な宇宙論的世界観にはほど遠い運行ではなかったか。まるでアンドロメダ星雲と銀河系<sup>かすい</sup>の乖離があろう。

日本基督教団部落解放センターを設立した被差別部落出身の今井数一[1923-1984]牧師<sup>85</sup>のメッセージ、「キリスト教の本質は、自分が自分を救うことができないということ、救いは外から来るということ」という指摘は的を射ている。キリスト教界は、非寛容さを滲ませながら、自分たちこそ唯一の救済できる宗教と錯覚している。ハヤトログアを忘れて、他の宗教をもグローバルに包括していこうとする熱狂がある。時代遅れ

<sup>80</sup> 『死者の復活』(テッド ピーターズ、ロバート・ジョン ラッセル、ミハエル ヴェルカー等 小河陽訳 日本キリスト教団出版局 2016年 399頁)。

<sup>81</sup> 岩村(「みんなで『死』を考える会」代表)は神戸新聞社から2011年3月『死』を考える講座を依頼され、4月12日からアルフォンス・デーケン、山折哲雄、島菌進、白方誠彌、大田正紀、金子昭、嶺重淑、宮本要太郎、北村敏泰などを講師に依頼する。<http://mamowth.com/>

<sup>82</sup> ψυχή <プスキ *psuche* 人間の魂>の代わりに、ちょうどそこに神を神たらしめるもの、すなわち πνεύμα <プニューマ *pneuma* 神の霊>が置かれる—これこそ完全な神の支配であり、これこそ死人の復活である。『カール・バルト 死人の復活』(山本和訳 新教出版社 2003年 179頁)。

<sup>83</sup> 『オリゲネス ローマの信徒への手紙注解』(キリスト教古典書庫 14 上智大学神学部 創文社 1990年 47頁)。

<sup>84</sup> 「私は復活であり、命である」 Έγώ εἰμι ἡ ἀνάστασις καὶ ἡ ζωὴ エゴウ エイミ エイ アナスタシス カイ ズウエイ *ego eimi he anastasis kai he zoe* 新しい創造の「命」が現われ、この地上の生死との間の絶対的寸断の境界が「復活」によって引かれた。宮本は『一神教とは何か』(123頁)で、ローマ・カトリック教会神学者の伊吹雄著『ヨハネ福音書と新約思想』(創文社 1994年 232頁)を引用。

<sup>85</sup> 『今井数一さんという人がいた』(日本基督教団部落解放センター 2004年 51頁)。

の権力を濫用し、正義を振りかざす独善性、独断主義者、宗教的エリート帝国として、スピノザ、カステリヨ、エラスムスを迫害した遺伝子を継承している。デカルトやブレイズ・パスカル[1623-1662]に多大な影響を与えたフランスのモンテーニュ<sup>86</sup>[1533-1592]著の『エッセー』には、聖書からの引用はほとんどない。しかし、キリスト教会が学ぶべき「寛容」<sup>87</sup>さが散りばめられている。

災害現場では、「語る」のではない。「聴く」という非宣教ケアで寄り添う縁が紡がれて非言語的コミュニケーションが可能になる<sup>88</sup>。“just staying with survivors”（被災者のそばにただいるだけのことだ）。ボランティア道には、自然にマニュアルがないようにマニュアル、プロジェクト、計画性がない。自然災害の現場で、観察し、検証し、まずうめき声に耳を傾ける。最善の方法、決定的な解決、成功はない。災害直後の現場では、薬も、医療機器もなければ、有資格の医師もいないからである。

わたしも2011年3月に第1次東北ボランティアに宮城県石巻市を訪問。さながら戦場であった。国道398号線脇に幾重も重なりあった自動車の壁の中をなめくじのように進んだ。大型バス、マイクロバス、数台の乗用車から、神戸からのボランティア学生たちは降りた。ドロ出し、がれき処理、使えなくなった家具などを搬出する。合間に阪神・淡路大震災を体験した地域からのメンバーだとわかると、生き残った様子を東北弁で話し出す。幽霊談もある。不条理な死の悲劇の遺族の中には、「かあちゃん、なぜ死んだべ」と妻のことを思い浮かべ、自暴自棄になっている方が多かった。阪神間からのメンバーは、東北の言い伝えである「津波てんでんこ」を初めて耳にする。わたしは牧師だから、目の前で津波から逃げられない高齢者がいれば、自分だけ逃げることをよしとするだろうか、と自問している。実際にはどんな行動をとるかわからない。被災者は、夜、石巻湾の波の音が聞こえると、トラウマのせい、耳をふさぐが、眠られない、と言う。食事ものどに通らない。神経過敏になって体重も極端に減っている、と。

京都大学防災研究所の矢守克也[1963-]教授は、「津波てんでんこ」の意味として、むしろ生き残ってしまった「サバイバーズ・ギルト」を低減させる機能があると言う<sup>89</sup>。心の荒廃が目に見える災害以上に被災者の澱に居座る。ケアするには、以前あった家庭の団らん、住み慣れた家屋の再建、収入の保証が復旧したとしても満たされない。なぜなら「心」、つまり「精神」が枯渇しているからである。自覚症状がないことにより、医師、行政、家族も心の奥底が見えていない。あれから10年、保育園に通う息子を亡くした母親が夕食前に買物へ出かけている。途中で、親しい近所の女性と出会う。「おばんです。今日の野菜、高い」と、当時、子ども同士が同級生だった子がもう高校生になっている。その息子を一緒に連れている。するとあいさつの言葉に詰まる。全身、硬直して、足早にそそくさとその場からいなくなる。その時、一言も言わず逃げるように立ち去った女性の心は闇である。しあわせそうに子どもと一緒に歩いている母親を「殺してやりたい」と本気で思っている。そんな自分がつらい。喪失の哀しみは風化しないのだ。

街並みのイルミネーション、量販店の駐車場は混み合っている。水産の都は不景気とはいえ、お金さえ出せばなんでも購入できる。10年前のように、ガソリン給油10リットル、野菜、魚など一人一点などという制限はない。中心部蛇田地域の建造物などは“reconstruction”リコンストラクションが行き届いているかのようだ。“building back better than before”（被災前よりよくなる）の地元の人たちの意気込みがあった。しかし、心の復興 restoration レストレーションはまだまだだ。両方が必要だろう。統一的コンプリヘンシブ<sup>90</sup>による

<sup>86</sup> ミシェル・エケム・ド・モンテーニュ[1533-1592] ルネサンス期のフランスを代表する哲学者。懐疑論者、人文主義者。エキュメニカルを推進、人文(じんぶん)主義者とは、ユマニスト(仏語 humaniste)のこと。ルネサンス期[14-16世紀]に、古代ギリシャ・ローマの古典を通して、人間研究を行った。他に、ペトルルカ、ボッカチオ。イタリアのピコ・デラ・ミランダ、ドイツのロイヒン、オランダのエラスムス、イギリスのトマス・モア、フランスのラブレールたちがいる。

<sup>87</sup> フランスの啓蒙思想家ヴォルテール[1694-1778]の影響により、フランス革命以降、「寛容」は極端に変質。人間中心主義が「世俗化」を過度に押し進め、ニヒリズムを招来。その反動としてファンダメンタリズムが萌芽。『キリスト教思想断層』(近藤剛)ナカニシ出版 2013年 136頁。

<sup>88</sup> 拙稿『書物を持って来てください』(本のひろば キリスト教文書センター 2020年9月1頁)。

<sup>89</sup> 『「津波てんでんこ」の4つの意味』(矢守克也 自然災害科学 31 2012年 42頁)。

<sup>90</sup> わたしがメッセージ、論考、会話で言及する「統一的コンプリヘンシブ」に開眼させたのは、関西学院大学の春名純人教授であった。1995年、春名の「哲学と神学」についてセミナーで聴講したことに発する。春名は、「なぜわれわれキリスト者は、近代主義に直面してかくも弱体であったのか。なぜわれわれは、いつも退却を繰り返したのか。それは専ら次の理由から説明される。生概念の統一性(unity of life-conception, die eenheid van levensconceptie)を欠いたからである」と、『キリスト教哲学序論』(春名純人 教文館 2018年 101頁)。

「復興の神学」「The Theology of Restoration」と名付けることにする。

＜結論＞

「災害」「防災」に、人類は叡智を傾けてきた。しかし、高邁な指導者は自然災害の現場で、無秩序の元凶にしか映らない。未来に希望を与えると信じてきた原発は、冷酷な怪物そのものである。レビヤタン<sup>91</sup>の正体であるメルトダウン(炉心熔融、ダム決壊(放流)、紅葉、三色の彩りの山並みがハイウェイ、トンネル、人間の経済収奪のロケーションに変貌している。ダビデがゴリアテに勝利したような勇気は自分にはない。ただ今日も旅する。「さあ、その地を自由に歩き回ってみなさい」と独り言をつぶやく(創世記 13:17)<sup>92</sup>。

わたしが「田・山・湾の復活」、ダム、制度の解放について着手した最初ではない。被災地で何か復興の果実をもらうこともない。世界の基が置かれる前からベールを被っていたものの悟りを開き唱導する指導者でもない。新しいものは何もない。アッシジのフランチェスコ[1182-1226]、田中正造[1841-1913]、マルチン・ルーサー・キング[1929-1968]の足元にも及ばない。無名である。キリスト教に連なってきたとはいえ、「自然神学」、「解放の神学」<sup>93</sup>、「希望の神学」などの世界を揺るがす著書もない。非学浅才な罪人<sup>94</sup>である。されど、あえて今日から言わせていただく。「復興の神学」。復興はヘブライ語では **תִּקּוּן** (ティクン *tikun* <復元、復活、再統合の意>、ギリシャ語で **ἀνάστασις** アナスタシス *anastasis*)。これを念じる。この継起のため、世直し、変革、自由を目指して、今日もうめき声が聞こえる辺境地に渡河する。危機に狼狽している世界の孤児、夫をなくした独身女性、高齢の独居者にお出合いする。貧しい人とコミュニケーションするのに、復興の神学とでも言うことにする。逆説だが神学、知識、資格は不要である。屑である自己は荒れ野、山、洞穴、地の割れ目をさまよってきた。喉のかわきに木々の茂み、空腹に孤児とのゲーム、疲れた肢体を横にするスペースが 20 センチあればいい。寝ている時、キングコブラ、わに、毒蜘蛛がそばで這っている<sup>95</sup>。しかし、空勇気ではないけれど、不思議とこわくない。亡き妻カヨ子がよく告白していた。「恐れるな、私があなたと共にいる。たじろぐな、私があなたの神である。私はあなたを奮い立たせ、助け 私の勝利の右手で支える」。ひとりではない。感謝する。

レジュメを、神戸国際支縁機構の村田充八理事に校正していただきました。また不明瞭な箇所について訂正していただきました事務局の村上裕隆代表、翻訳家徳留由美氏、佐々木美和氏にも感謝します。

<sup>91</sup> 拙論『レビヤタンの正体(1)～(3)』(神戸国際キリスト教会 2020年9月6日～2020年10月11日)。

<sup>92</sup> 9節の後半。「私はその地をあなたに与えよう」ヘブライ語の9節全文、**קום הינה לבבאין לארצה וליחבה פי לה ארצה** クム ヒトウハレフ バアレツ レオルカハ ウレロフバハ キー ラハー エテネンナ *qum hithalek baarets leorkah ulerohbah ki leka etenna*。

<sup>93</sup> 拙論『キリスト教と防災(2)「逃避の神学」から「解放の神学」への回心』(関西学院大学 2020年3月11日)。拙論『解放の神学とは何か』(神戸国際キリスト教会 2021年5月2日(1)、5月9日(2)、5月16日(3))。

<sup>94</sup> 罪とはアダムから継承している原罪ではない。ヘブライ語、ギリシャ語でも靈的とは限らない。『キツテル新約聖書神学辞典 罪』(G.クヴェル 教文館 1974年 7,11-15,51頁)。無関心、無知、愚かさである。罪とは、「無知(無関心)」(マタイ 25:41-43)、「自己正当化」(マタイ 25:45)、「偽り」(ヨハネ 8:44)である。「最も小さな者」(マタイ 25:45)に対する無関心、無知は、永遠の懲らしめ、すなわちゲヘナに行く。世の窮状に対して愛の不在、人と人、神と人、人と被造物の「関係」の破棄が罪人の断面図である。『解放の神学』(G.グティエレス 関望、山田経三訳 岩波現代選書 1985年 186頁)。

<sup>95</sup> 「生きるすすれば主のために生き、死ぬすすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです」(ローマ 14:8)。ドイツルター派のプロテスタント神学者ハウル・アルトハウス[1888-1966]は、死を克服する確信はキリストの復活にあると言った。なぜなら「死んでも生きる」からである(ヨハネ 11:25)。『死と生命について』(パウロ・アルトハウス 三浦義和訳 ルーテル社 1957年 21頁)。